

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 12 日現在

機関番号：54701

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520819

研究課題名(和文)オランダ植民地期インドネシアのバティック産業の展開

研究課題名(英文)Expansion of the batik industry in Netherlands India

研究代表者

赤崎 雄一 (AKASAKI, Yuichi)

和歌山工業高等専門学校・総合教育科・准教授

研究者番号：10342536

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：この研究では、インドネシアのバティック(ロウケツ染め)産業の成長過程、企業と労働者との関係、地域社会にバティック企業が及ぼした影響について、中部ジャワのスラカルタを中心に検討した。

19世紀中頃からスタンプと合成染料の導入による技術革新によってバティックの産業化が進展した。第一次世界大戦の影響による材料費の高騰、イミテーションバティックの流入、産地間競争の激化などにも関わらず、1920年代、30年代に一定数の労働者を雇用し続けていたことは評価できる。

研究成果の概要(英文)：This research is concerned with three points about the batik industry of Indonesia centering around Surakarta in central Java. The first is the growth process of the batik industry. The second is the relation between the batik companies and their workers. The third is the influence of the batik companies on the community.

The industrialization of batik production progressed with the technical innovations by of stamp and synthetic dye from the middle of the 19th century. In spite of the jump in the cost of materials under the influence of World War I, the inflow of imitation batik, and the intensified competition between places of production, the industry importantly continued to employ many workers from the 1920s in the 1930s.

研究分野：近代インドネシア史

キーワード：インドネシア バティック

1. 研究開始当初の背景

19世紀から20世紀初めの東南アジア社会は植民地経済として理解され、その歴史研究の中心は輸出型産業におかれてきた。一方でそれぞれの国内向け産業、流通、消費などの問題に関してはあまり重点が置かれていない。東南アジア史に関して、世界市場などの国際的な視野を持ちながら、地域社会になお一層根付いた議論を深める必要があるのではないかと考える。

インドネシアにはオランダ植民地期から現代に至るまで「民族産業」として理解されている産業が2つある。クレテック(丁字入りたばこ)産業とパティック(ロウケツ染め)産業である。この2つの産業は主に国内市場向けの産業であるが、植民地経済から現代にわたってインドネシア経済に多大な影響をもたらしている。インドネシアの商業分野では植民地時代から一般的に華人が優勢であるとされるが、2つの産業では例外的に現地人が活躍した。従って、これらの産業について明らかにすることは、民族資本家の成長を明らかにするということになる。

筆者は近年、オランダ植民地期におけるクレテック産業の成長に関する研究を行い、その中で、19世紀後半ジャワ人商人により製品化されたクレテックが広範な商業ネットワークを持つ商人達によってジャワ島全域、それ以外の島々まで流通した過程、労働者の雇用方法、恐慌期の危機とそれについての対応などを検討した。これらの研究の延長としてパティック産業に関する研究を考えている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、第一に、オランダ植民地期のジャワ島のパティック産業の展開を明らかにすること、第二に、パティック企業と労働者との関係、雇用方法、賃金、失業者の問題などから地域社会に対するパティック企業の影響を検討することである。対象地域としてはパティック産業の中心と言える中部ジャワのスラカルタとプカロンガン、ラセムなどのジャワ島北海岸の都市である。北海岸の都市はこれまでクレテック産業で研究してきた地域であり、比較研究ができ、史料的にも重なるものが多い。

対象時期については、三つの時期に分け、それぞれの変化について検討する。

第一期は、19世紀半ばから20世紀初めの時期である。パティックの起源については明らかでないが、大航海時代の旅行記にパティックらしい記述があることから17世紀のジャワではすでに使用されていたと考えられる。インド産綿布にチャンティンと呼ばれる道具を使って手作業でロウ置きを行い、植物性染料を用いて染色していた。それが19世紀半ばになるとイギリス製機械織り綿布が流入し、その後、オランダ製も使用されるよ

うになる。ロウ置きに関してはチャップと呼ばれる銅製のスタンプが導入され、染料に関しても化学染料が普及した。またイギリス、オランダからパティック模様の繊維製品が輸入されるようになった。このように19世紀半ばから20世紀初めにかけて、世界市場との関わりが強まり、産業に大きな変化が生じていた。

第二期は、第一次世界大戦期である。船腹不足の関係で輸入品である原料価格が高騰した。このことがパティック産業に及ぼした影響に関して考察する。

第三期は、1920年~30年代である。この時期のパティック市場はジャワ島からそれ以外の島々へと拡大し、1930年代の不況下にあっても生産量を伸ばしていた。ただし、労賃は低下していた。労働形態についても、従来の家内制手工業に何らかの変化があったのかどうかという問題も重要である。また、材料となる日本製綿布、日本製繊維製品が大量に流入したのもこの時期である。

3. 研究の方法

19世紀半ばから20世紀前半のパティック産業に関する研究の史料となるものは、オランダ植民地政府が残した報告書、同時期の経済状況に関する植民地雑誌の類が中心となる。これらを網羅的に収集しようとするればオランダとインドネシアでの史料調査が不可欠であり、この調査を研究期間に行った。

初年度の史料調査はオランダのハーグにある国立文書館と国立図書館、ライデンにあるオランダ王立言語地理民族学研究所とライデン大学図書館、広島大学図書館で行った。

(1)国立文書館では一次史料をデジタルカメラで撮影し、モバイルPCに保存する作業を行った。史料はMailrapportenとVerbaal(蘭領東インドの植民地政府からオランダに送られてきた行政文書、Memorie van Overgave(蘭領東インドの州理事の引き継ぎ文書)、スマラン・ジョアナ鉄道会社報告書、スマラン・チルボン鉄道会社報告書、繊維関係の会社の報告書などである。

(2)オランダ王立言語地理民族学研究所(蘭領東インドに関する刊行物を最も網羅的に収集している研究所)では、パティックに関する公刊物、Koloniaal Verslag、Indisch Verslag(蘭領東インドの年次報告書と統計)、植民地経済に関する雑誌などを調査した。

(3)ライデン大学図書館では植民地経済に関する雑誌などを調査した。

(4)広島大学図書館では、三井文庫を調査し、戦前に発行されたジャワ島の繊維製品に関する文献を収集した。

平成25年度の調査はインドネシアで行った。

(5)インドネシア国立図書館では、インドネシア人研究者、ジャーナリストによる調査報告などの文献を収集した。

(6)スラカルタ、チルポンのパティック作業所、博物館を見学し、史料を収集した。

4. 研究成果

(1)パティックの歴史

パティックの起源についてははっきりしない。17世紀のオランダ人の史料によると、マタラム王宮の女性が彩色の施された服を着ていたという記載があるが、これがパティックかどうかを確定することは困難である。18世紀末、19世紀初めになると原料や道具の具体的な記載があり、パティックが生産されていることが裏付けられる。19世紀後半には、重要なパティック生産地として、プカロンガン、スラバヤ、ジョクジャカルタ、スラカルタが知られるようになっていた。

19世紀は大きな技術革新が起こり、これがパティックの産業化を導いた。まず、ロウで模様を描くときにペンのようなチャンティンという道具を使用していたが、19世紀の中頃、チャップと呼ばれるスタンプでロウの模様を描く方式が改良された。チャップの導入により、これまで服一着を作成するのに最低12~15日必要だったものが、1日に20着の作成が可能になった。次に合成染料の導入である。従来の天然染料に比べ、合成染料は作業日数が短縮でき、洗濯、天日に強い特徴がある。19世紀中頃、ドイツでアニリン染料、アリザリン染料が発明され、20世紀になると蘭領東インドでの販売が拡大した。

(2)スラカルタのパティック

パティック業の中心の一つは中ジャワのスラカルタである。かつて王宮に近いKauman地区がパティック産業の中心であったが、20世紀の初め、Lawean地区が中心地として成長した。Lawean地区では主に低品質で安価なパティックが生産されていた。元来、現地人中心の産業であったが、チャップの導入後、華人商人も参入した。

パティックの材料については華人が圧倒的に支配していた。茶染めのソガ染料についてはスンバワ産が好まれ、その中心であるTingi樹皮は低品質の製品を多く作るラウエヤンで多く消費された。藍染めは天然藍からドイツ産合成藍に変化した。ロウは東インドネシア産の蜜蝋に代わりパラフィンが多く使用されるようになった。綿布の商いも大部分が華人とアラブ人の手にある。通常、商品は輸入業者によって仲買人に3ヶ月のクレジット払いで提供された。

(3)第一次世界大戦期のスラカルタ

1915年、ドイツが戦争状態に入ったためドイツ産合成染料の輸入が困難になり、天然藍の価格も500%以上も高騰した。1916年以降、植民地政府が輸入・配給を管理したが染料の価格は高値が続いた。綿布についてもオランダ産、イギリス産の輸入が困難となった。仲

買人がクレジット購入システムを停止したことによって、小規模なパティック企業家は打撃を受け、多くの企業が操業を停止した。労働者についても需要が減り、賃金は30~50%減少した。ただ技術の高い熟練の労働者はよい賃金を得ていた。大戦による混乱で、スラカルタ地域で16000人、スラカルタ市内だけで9000人が失業した。

(4)1920年代のスラカルタ

1920年代になると、染料についてはドイツ製合成染料の安定供給が可能になり、8割以上をドイツから直接輸入するようになった。さらに綿布については、大戦期に大幅に減少したオランダからの輸入が増加した。しかし、20年代末になると日本製が増加する。未さらし綿布については、大戦期から日本が輸入を伸ばし、市場を圧倒した。綿布の価格は大戦中から乱高下していた。その結果、パティック企業間の競争は激化し、多くの企業が操業停止に追い込まれた。

スラカルタは他地域のパティック産業との競争に苦しむようになった。西ジャワの販路は、タクシマラヤ、プリアンゲルにより奪われた。それはスダ人経営者が作る布のデザインが好まれたためである。中ジャワ・東ジャワの販路は、スラカルタのパティックの色・デザインを模倣したトゥルンアゲン、アンバラワに販路を奪われた。また西ジャワや中・東ジャワ都市部で購買者の好みの変化したことも重要である。プカロンガン産のような鮮やかな色合いが好まれるようになった。

このような変化に対してスラカルタの企業は次のように対応した。第一に、安価なパティックに対する合成染料の使用量を増加させた。ただ上級のパティックに対しては天然染料を使用している。第二に低品質のものを作るラウエヤンでは安価な日本製未晒綿布を用いるようになった。第三に現地人企業がチャップ生産に特化した。1927年、スラカルタの手書きパティック業はたった4つの企業のみで、そのうち3社が華人企業、1社がヨーロッパ人企業となった。それによって、安価な製品を外国・外領、特にジャワ人移民がいる地域への輸出を拡大させた。

(5)産業としてのパティック

一般的にはパティックは多くの利益を稼ぐことができる産業であり、時間、労働力、材料の浪費にも関わらずそれを維持している。年間の王侯領のパティック取引高については、鉄道による輸送が1925年に1100万ギルダ、郵便による小包分を加味すると1150万ギルダである。これに税を抑えるため低く見積もられている額を加えると生産額は合計1500万ギルダとなる。同様に輸送のデータから見積もると、ジャワ全体で年間のパティック生産額は少なくとも4000万ギルダと見積もられる。そのため全体の約38%を王侯領で生産していた。この経済的利益は

蘭領東インドの国内産業において無視できないものであると考える。

(6)まとめにかえて

パティック産業の問題点は疑いなく原料の調達である。そのほとんどが外国に依存しているため、世界経済の影響を直接被った。また材料の供給において華人商人への依存は続いている。しかし、第一次世界大戦期、1920年代の大きな変化の中で、王侯領ではパティック全体の約38%を生産し(1925)、スラカルタのパティック企業が労働者を常に一定数を雇用し続けていたことは現地社会にとって重要であると考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 件)

〔学会発表〕(計 1 件)

赤崎雄一、オランダ植民地期インドネシアのパティック産業、広島史学研究会、2014年10月26日、広島大学(広島県東広島市)

〔図書〕(計 1 件)

岩波書店辞典編集部編、岩波書店、岩波世界人名大辞典、2013、「スカルノ」など79項目

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

赤崎 雄一 (AKASAKI, Yuichi)

和歌山工業高等専門学校・総合教育科・准教授

研究者番号: 10342536

(2)研究分担者

()

研究者番号:

(3)連携研究者

()

研究者番号: